

経正

一場もの(中人がない)の小品であるが、クセも修羅場もあって、また、琵琶をサブテーマとして幽玄味を加えた佳曲であるので、若い能楽師が始めて能を舞うときに本局を選択することが多いようである。

悲劇調でなく、全体的に爽やかに、重くれないように謡い上げたい。

シテ青年貴公子らしく、颯爽と若々しく謡って欲しい。最初のサシ謡(和ツヨ)からこの心得で謡わないと、小品であるがゆえに挽回が利かない。

謡い始めて二行目の「夏の夜の・・・」から柔吟になるが、ここで気を抜かず、逆に引き立てて謡うと良い。三丁裏の地に引き渡すときの「陽炎の」も同じ。

六丁裏「・・・雲の端の」も充分息継ぎをしたあと、改めて引き立てて、大きく。

ワキ旅僧ではなく、御室の御所勤務の、経正の先輩乃至師匠格の人物であるから、重い役どころで、謡いの総量はシテよりも多い。しかし、あまり偉ぶったり、重も重し過ぎると曲趣を殺ぐのでシテと適度の兼ね合いを必要とする。但し、シテが登場するまでは、シテと同格のつもりで、じっくりと謡うべし。

小督

恋がテーマであるにも関わらず、当人同士はからまないで、ラブレターの取次ぎ役をシテとしたところに、ひねりがあり、それ故にツレがシテと同格の位となつて、シテとツレの絡みを面白くさせている。

シテメツセンジャーボーイと考えると軽くなる。直面のシテに共通することであるが、男らしさ、凛々しさが基本。

最初の詞「誰にて渡り候ぞ」はゆつたり、重めに。後シテの出「あら面白の・・・」は爽やかに、引き立てて。そのくさりの最後、「牡鹿なく・・・」は謡い出しの前に一拍間をとり、たっぷりと引き立てて。(節で要注意は、おーしかあんぐん)

九丁表「恐れながら・・・」節扱ひもさることながら、シテは床に手をつき、低い姿勢で謡っていることを意識すること。(相手との距離とこのような身体の姿勢が謡いに大いに関係する)

ロンギのシテ、一セイ、ワカ共に、シテが無事お役目を果たしたことでもあるので、晴れやかに、少し勇ましく。但し、シテの留謡「言の葉もなき・・・」は思い切つて低く出てあげないと、地が高くなつてしまい、地頭に恨まれかねない。

ツレ充分にシテの格であり、そのつもりで謡わなくてはならない。(帝の想い人です)従つて、通常のツレの如く、敢えて調子を上げることなく、落ち着いた謡をして欲しい。但し、七丁表のシテとの連吟はシテを立てるべきであろう。

技巧的な面では、八丁裏「さらば此方・・・」の節扱ひに要注意。下音に下げるところを正確に。前掲のシテの「恐れながら・・・」とは、似ているけれど、下音と崩しの違いがあることを弁えて頂きたい。

トモかなり重要な役割で、従つて謡う量も多く、ツレの謡いに相似の箇所もある。そうは言つても、ツレよりも出すぎてはいけないし、ツレよりもやや高めにとること。

地謡何と言つても、駒の段が大切。シテの動きと心情にぴったり合せた謡でありたい。

三井寺

旧暦八月十五夜、三井寺の境内で催される月見の集いでの母子再会という状況設定の中で、しかも、美しい詞章に散りばめられた本曲は、蓋し名曲と言ふべきであろう。

ただ、地謡に参加の方々は充分に曲趣をお楽しみ頂きながら謡うことが出来るが、シテ、特に後シテは楽しむどころではない。単に節回しだけの技巧だけではなく、情感の表現、起伏も訴えないといけないから、付け焼き歯ははがれ易い。

シテ狂女物でも、「百萬」のように、最初から狂つて登場するのではなく、本曲の前シテは、悲しみにくれて、仏にすがる母親であるから、しみじみと、じっくり謡うこと。

後シテは一転して狂女の謡（引き立てて運びめ）となる。感情の起伏が激しいから、後シテの出から、剛吟、柔吟が交互に入り混じってくる。

この二つの吟は音階体系も発声も異なるから、上手に謡うコツは、例えば柔から剛に転換するときは、気分を変え、直前の謡いをころつと忘れて、別の謡と思つて改めて謡い出すと良い。

もう一つ、どんな曲でも、剛吟の中音は思い切つて高く、柔吟の中音は思い切つて低く出るように心がけて欲しい。（これが分かつていても、なかなかそうはいかないところが難しいところ）

ロンギになると、再び落ち着いて、しかし、あくまでも明るさを表現したいもの。

このように、三段階の異なる謡を聞かせることが、ミソでもあり、課題でもある。ワキⅡ総じて狂女物のワキは重い、というよりは威厳があり、自信満々の風情を持つてい

求塚

ギリシア悲劇にでもありそうな、典型的な男と女のもつれと悲惨な展開、そして、それらを仏教色に染めあげて、魂を救う（？）結末。本曲がシェークスピアよりもはるか以前に創作されたことに驚きを禁じ得ない。

構成の妙は、単に陰惨な情痴の世界に終始することなく、あまたの美女が若菜を摘む、早春の野の光景には、悲劇の翳りもないこと。舞台の上では、この場面が一段落すると、ツレが一斉に姿を消してシテ一人が取り残される。まさに、暗転の手法ではないか。

だから、菜摘みの場面を謡うロンギは、テーマとは関わりなく、シテであれ、地謡であれ、あくまでも明るく、屈託なく謡うべきだと思ふ。

六丁裏以降は十二丁最後の行までの間は、陰惨という言葉がびつたりの雰囲気であり、技巧よりも、雰囲気作りがシテ、地謡ともに優先する。

シテⅡ冒頭の一セイ、やや抑え目にして派手にならぬよう。以下、上歌止めまであせらず、じっくりと。このように重い曲の傾向として、三丁表の「若菜」、四丁裏の「古き歌」などハネ張りで謡うことが多くなる。

ロンギは気を変えて明るく、のどかに謡うべきであると筆者は理解している。五丁裏の「春の野に」のような繰り返しはロンギによく出てくるが、最初はじっくり、二度目は心持サラリと謡うべし。

語りも文意を良く理解することがまず基本。中音の謡い出しは、ごく抑えて出て欲しい。そうしないと後のハリ浮キや振り浮キが生きてこない。

十丁裏、「有難や・」以降三行の謡いと「恐ろしや・」以降ではがらつと変わる、謡の技巧の聞かせ場所、段々に盛り上げ、力を絞上げていきたい。

ツレⅡシテを補佐する場面は前に限られるから、屈託のない謡で構わない。素直にシテに付いていって欲しい。

ワキⅡ曲自体が重くなればなるほど、ワキの役割が大切となる。最初に出てくるワキが全体の曲趣を左右するから責任は重い。あくまでも落ち着いて、出すぎず、弱からず。地謡Ⅱ全曲謡甲斐があるが師伝も多い。珍しいハコ節もあるし、十二丁裏「暗闇・」も難しい。

班女

全編にわたって思いを募らせる恋の曲。詞章の艶っぽさでは、花筐を越えているのではないか。謡とは関係ないが（多少はあるが）道具立てとしての扇も面白い。以上

シテⅡ普遍的な説ではないが、私見としては、詞章がかなりねちっこいから、逆にケレン味なく謡うほうが良いのではないかと思つている、特に後シテが重く、まったりと謡われると、いくら上手でも好きになれない。

ワキⅡ三井寺と似ているが、こちらのほうが恋される役割だから、少し、引き立てて、若造りの謡いでありたい。

地謡Ⅱ小督同様、この曲もカヘテの中音で出る場合が多い。この音の練習曲でもある。シテがケレン味なく謡い、地謡が情をこめて謳い上げるのが筆者の理想。以上